



機動戦士ガンダムサイド
アナライズストーリー
星野幸介



機動戦士ガンダム

サイドアナライズストーリー

VOL1.6

星野幸介



機動戦士ガンダム サイドアナライズ ストーリーVOL1.6 第四話サイド0（ゼロ）降下阻止命令!!

第四話 サイド0（ゼロ）降下阻止命令!!

1. ジャブローの悪夢

私は〈夢〉なんて大嫌いだ。

〈夢〉なんてくだらないものだ。

荒唐無稽でつまらないものだ。

嘘っぱちでありえないものだ。

あまりの馬鹿馬鹿しさに寝起きに

笑い過ぎて涙が止まらなかったことが……

何度あったことか。

追跡していたホワイトベースと共に、大気圏に突入して地球に降りたシャア少佐は彼らしくもなく、上司のドズル・ザビ中將が溺愛していた弟のガルマ・ザビ大佐をホワイトベースの攻撃から守りきれず死なせてしまう大失態をおかし、左遷されてしまった。

ところがどんな裏取引をしたものか、ドズル・ザビ中將の姉キシリア少將に拾われ、おまけに階級も二階級特進の大佐に昇進して、戦場に復帰した。

復帰早々に、彼は地球連邦軍の本拠地ジャブロー秘密基地の入口を発見し、それを突破口にして地球上のジオン軍を総動員した大部隊が出撃した。

連邦軍にまさか?!と思わせる完全な奇襲でそれは大成功するかに思われた。だが、さすがに敵の総本山に殴り込みは焦りすぎた。

地球連邦軍の大將で最高司令官レビル將軍の本拠地だ。手薄なわけがない。長年さんざん探し続けてようやく見つけた敵の秘密大要塞の進入経路だ。奇襲が成功すれば戦果をあげるチャンスだ。猛る気持ちはわかる。

でもムチャすぎた。調子にのりすぎた。

物量が違いすぎる。

敵の地元だ。アウエーの戦いにも程がある。

いくらザクで宇宙や地球を一時的に制覇したとはいえ、宇宙育ちが多いジオン公国の人間達が、初めての地球の重力や環境にそうそう簡単には慣れない。

〈地球連邦軍〉というぐらいだ、地球での戦い方には場慣れしている。

しかも最悪なことに、私が恐れていた地球連邦軍の最新型主力モビルスーツ〈ジム〉がよりによって、ここで大量生産されていたのだ。

格好の実戦テストの標的にされてしまった我がジオン軍大部隊は健闘したが結局ほぼ全滅してしまった。

勢いに乗った地球連邦軍はジオン公国のある月の裏側のサイド3を一挙に落とそうと、宇宙の戦力を固めて大軍勢で進行し始めた。

改修工事を終えて避難民を全て降ろし、身軽になった〈木馬〉——ホワイトベースもその戦力になるべく宇宙へ向かった。

完全な負け戦だ。それ幸いとシャア大佐もその後を追った。

だが、ジャブロー基地周辺の調査、検地は私たち〈決戦兵器開発部・回収分析班〉が何よりもしたかったことだ。

ベールに包まれていた地球連邦軍の最新型主力モビルスーツ〈ジム〉を調べられるのだ。ハーミットに搭載されている大型の大気圏降下カプセル〈コムサイ〉に格納されていたザクを蹴飛ばすようにどかして、詰められるだけのメンバーと機材を載せ、期待で高鳴る胸を押さえて私達はジャブロー基地周辺にコムサイを降下させた。

負け戦で終わりはしたものの、ジオンの総力を結集した戦闘だ。

ジャブロー秘密基地にもかなりの打撃があり、着地した南米アマゾン森林地帯の空き地は死んだように静まりかえっていた。

連邦軍の高射砲で蜂の巣にされて墜落した、膨らんだフグのような格好をしたジオンの戦闘航空空母〈ガウ〉の残骸やガウから地上への降下中に撃墜されたモビルスーツ〈ザク〉〈グフ〉〈ドム〉の破片、戦闘機〈ドップ〉の破片があたり一面、山のように積み重なっている。

重力に不慣れな訓練不足の兵達を降下させれば無理もない。

ふと川を見れば〈ゴック〉〈ズゴック〉〈アッガイ〉〈ゾック〉など、そうそうたる顔ぶれの水陸両用モビルスーツたちが新型の水中用敷設機雷でことごとく沈められていた。

全機種、対水中機雷用装備が備わっているはずだが、ジオンの水陸両用モビルスーツにさんざん手を焼いてきた連邦軍がいつまでも手をこまねいているはずがない。

深海の水圧に耐える重装甲で造られている水陸両用モビルスーツを簡単に破壊する高性能爆薬と超高性能センサーの固まりの機雷は安く大量にばらまけるだけあって脅威といえる。

ズゴック一機の製造予算でいったい何万個の機雷が購入できることやら。

費用対効果抜群だ。

一見いつもジオン軍の後手に回ってばかりいるように見えるが、確実に、こちらの出方を見て要所要所を的確に押さえ、良策を打ち出してくる。

連邦軍はザクに大敗したルウム戦役以降、ここ一番の大部隊が動く、巨大な戦場では全戦全勝なのだ。

先手必勝と図にのるのもいいが、後出しジャンケンも必勝なのだ。

私にはそれが恐ろしい。

もちろん友軍のおびただしい残骸の群れの中にも善戦した機体はあって、水陸両用モビルスーツ〈ズゴック〉と相打ちになった連邦軍の新型主力モビルスーツ〈ジム〉の残骸も山ほど残っている。

その中でもなるべく状態の良い物を探し出し、ジオン・連邦両パイロットを吊った後、持ち帰るサンプルやデータの採取に全力を注ぐ。

本職なので全員動きが嬉しそうに生き生きとしている。

持ち帰りたい物が大量だ。ここは宝の山だ。

例によって迅速にデータ収集を完了させ、早々に消え去るのが鉄則の我々はテキパキと作業を完了させた。

後は六時間後に迎えに来る高速戦艦〈ザンジバル〉を待って乗り込むだけだ。

そのザンジバルに大気圏用離脱ブースターを取り付け、ジオン軍の基地から宇宙に向けて発進し、大気圏艦艇待機区域で待機中のハーミット一番艦と合流すれば今回のミッション(作戦)は無事終了である。

肝心の仕事が予想以上に上々な首尾だったので、六時間後に迎えに来るザンジバルを待つ間、私はメンバーに五時間の休息を与えた。

アマゾンの気が狂うような暑さと湿気の中、私といっしょに汗まみれ泥まみれ虫まみれになりながら、ナガイ中佐以下のメンバーはよくやってくれた。

着陸させた大気圏降下カプセル〈コムサイ〉には超高熱の大気圏降下に耐えるぐらいだから強力な冷却空調はあるが、本来シャワールームなんてものはない。

けれども仕事柄、宇宙と地球の往復が多くなりがちで、地球のどこへ着陸するハメになるか判ったものじゃないので、申し訳程度のシャワールームや仮眠用カプセル、食料庫など簡単な滞在設備を私がメンバーに命令して無理矢理設置させたのだ。

本来、楽にザクを二機格納できるはずの大気圏降下カプセルなのにザクが肩身を狭くしないと格納できないのはそういう理由だ。でも今回はその申し訳程度のシャワールームが役に立ちそうだ。

なにせ南米アマゾンは猛烈な暑さに湿度100%、不快指数・疲労指数MAX《マックス》の土地。

こんな緑の地獄では冷たいシャワーでも浴びないと、とてもやってられない。

そんなわけで五時間の休息はシャワーを浴び、汗を流した後はビールを一杯やって目覚ましタイマーが鳴るまで仮眠というコースを全員一致で選択した。

一つしかないシャワールームだ、取り合いになるのを覚悟していたので、「今日はみんなよく頑張ったから私は一番後でいいよ」

と労をねぎらうつもりで言ってみたら、

「レディファーストです、少将殿お先にどうぞっ!!」

と、みんな低姿勢で遠慮する。

こいつらミエミエで怪しい！ なにか企んでる！

「念のためいっとくが、覗こうとしても無駄だぞ。内側からロックできる防音の小部屋だし、ドアも頑丈でカーテンも私が確認済みだ」

「い～～え、めっそうもないっ!! 我々は紳士であります。紅一点の女性に対して、そんな卑劣な真似はいたしませんっ!! 第一、少将殿にそのような無礼を働けば全員軍法会議ものでありますっ!!」

なんなんだナガイ、ギレン閣下にもしたことないような、そのマジメ腐った敬礼は?!
ケロ口軍曹かお前は?!

「そのわりにはみんなニコニコしてるような気がするの私の気のせいかい?!

それとも蚊に刺されて頭をTウイルスにやられたのカナ?」

「我々は少将のシャワーのお邪魔は一切致しません!! 我々自身も正々堂々シャワーを浴びることを誓いますっ!!」

「そのニコニコした表情がすごく気持ち悪いけど、まあいいでしょう。みんなの好意に甘えて先に使わせてもらうわね♪」

「イエッサー!!」

了解でしょ、うちの部隊は。

シャワールームへ入り、帽子を取り、丸メガネをはずし、上着とレギンスを脱いだところでそっとドアの狭い隙間から外の様子を伺う。

人に覗くなど言っというて、自分で覗いてりゃ世話がない。

メンバーのことは信用も信頼もしているけど私は用心深いのだ(笑)

確かに彼らは誓い通り、覗きもせず紳士的だった。

私が入った後のシャワー順を紳士的にジャンケンしたり、どつきあったりして眼を血走らせて決めていた。

「あっ、きったねー、おまえ先かよっ?! 俺に代われっ!!」

「あっ、バッキャロー!!、少将の後におまえが入ったら〈ソーテル又分《ぶん》〉薄まっちゃうだろーがっ!?)」

「濃厚な〈ソーテル又分〉は俺が吸うんだ――っ!!」

「なにっ、俺が最後だと?! ふざけるな!! なにが悲しゅうて俺がおまえらの濃い成分吸わにゃならんのだ!!」

「少将は俺の嫁～～っ!!」

あ、あのバカ共、眼、血走らせてなにやってんだ……

なんなんだ、〈ソーテル又分〉というのは?!(笑)

ていうか、ナガイ、おまえもいっしょかいっ!!(怒)

おまえら全員明日から二等兵に格下げ!! 南極条約抜きの独房行き!!

ミラン操舵長やチェーンちゃんを連れて来なくてよかったよ、ったく……。

情けない盛りのついたプレデター共の醜態に呆れた私はさっさとドアを閉めてシャワーを浴びることにした。

「ソートルヌ分でも、なんでも好きに吸いなさいな」

よくわかんないけどシャワー終わったら、後でオーデコロンでもハデに撒いてソートルヌ分とかいうのグチャグチャにしておこっと(笑)

汚れた着物を脱いでアナハイム製の全自動瞬間洗濯機に入れる。シャワーが終わった頃には畳まれて綺麗さっぱりふんわり仕立てで仕上がる。

シャーーーーッ

バルブを開けるとシャワーノズルから冷水が頭から降りかかる。

「う～～ん、気持ちいい♪」

綺麗さわやか、気分爽快。

やはり女性はいつもこうありがたいね。

手入れ不足になりがちな戦場の二十四歳のお姉さんだが、玉の肌は未だ健在で、肌についた水が玉になってはじいてくれるのはうれしい。

「それにしても……」

自分でいうのもなんだが、私はちょっと……

胸が大きい。

訓練では徹底的に重力負荷をかけたりするが、基本、宇宙育ちで無重力生活が大半なので胸も肩も負担を感じたことがまるでないのだ。

けれどこうしてたまに地球に降りてきたりすると、とたんに肩や胸にズシッと重みがきてつらい。

自分の身体ながら、いきなり変なところに四六時中慣れない負担が、急に大きくかかるのでバランスが狂って歩き方も少し不自然になり、身体のおちこちが痛い。

「ジオンが負けたら少将なんて長生きできないよ。お子様産んで育てる前に、先がない命なのに、これがほんとの無駄に巨乳ってやつね……」

胸を自分で抱いてつぶやいた。

むなしくなったので、さっさとシャワーを済まして服を着替えて外に出る。

シャワールームのドアの前で、眼に鉄拳の痣ができたナガイが突っ立っていた。

「ソーテル又少将、円満な会議の結果、僕が次に入ることに決まりました！」

「ナガイ、紳士もいいけど、あとで顔にドーラン塗っときなさいよ。帰ったらミラン操舵長やチェーンちゃんが心配するから」

「へ?!」

「入ったらシャワールームの鏡で顔見てみ」

一言忠告してやり、仮眠用カプセルへ戻る。

狭い仮眠用カプセルの中に設置されたベッドに座る。

厳しいジオン公国の酒税法をくぐり抜けた第三十のビールと呼ばれる合成疑似クローンポップで造った生ビール缶のプルトップをプシッと開ける。

なんとなく黄金色をしてメレンゲみたいな固い泡をしたビール(?)っぽいのがよく冷えている。

炭酸ガスはボコボコ入っている。

「よ、ようは冷えてて黄色くて炭酸とアルコールが入ってればいいのよ、アルコールが……」

自分を慰めるように言って一口飲んでみた。

私の名字にソーテル又なんて、甘口の美味しい貴腐ワインの名前がついているのに実際本国から支給されて口にできるのは、スティーブン・キングの〈灰色のかたまり〉に出てくるようなおかしなビールというのはいい加減にしてよねって感じだ。

「うげ……、マズ…… これビールに対して存在が失礼な味っ!!」

疲れていたせいか、元々アルコールに弱いせいか、二口、三口すすってるうちにアルコールが身体に回ってきたのか耐えられない眠気が襲ってきた。

「た、たいまー、目ざまし……」

少将という立場の責任と根性だけでかろうじて目覚ましタイマーをセットした私は無意識のうちに薄布団の中に潜り込み、うたた寝を始めてしまった。

それが長い悪夢の始まりだった。

2. サイド0（ゼロ）降下阻止命令!!

2. サイド0（ゼロ）降下阻止命令!!

それは私、ハルカ・ソーテルヌがまだ中佐だった頃の話だ。

当時も丸メガネは付けていたけど、髪はボブにしていたっけ。

今から数年前、月の裏側にある、地球から一番遠く離れたスペースコロニー〈サイド3〉に建国された、宇宙で生まれ育ったスペースノイドの国ジオン公国と地球連邦との対立が決定的になり、ルウム戦役が勃発して地球連邦軍の星間戦争が激しくなり始めた頃だ。

この時、画期的な新兵器がジオン公国に誕生した。

今まで宇宙生まれ、コロニー育ちのスペースノイドを弾圧・虐待してきた地球連邦軍の巡洋艦サラミスや戦艦マゼランを核弾頭搭載のバズーカで一撃のもとに蹴散らしてきた一つ目の巨人口ボット。

ジオン公国がミノフスキー博士の協力により開発した新型モビルスーツザクmark Iだ。

まだまだ不完全な所が多いまま実戦に投入されてしまったモビルスーツ。

現在ジオン軍の主力兵器として完成した、みんながザク、ザク言っているザクmark IIの一つ前の型だ。

実のところ、私が当時十代の後半で中佐にまで昇進できたのは、重巡洋艦〈チベ〉による艦隊戦の功績があったこともさることながら、ザクmark Iの開発に私が携わり貢献したことが大だったと思う。

なにせザクmark Iは虐げられてきたジオン国民が独立戦争を始める自信を持つきっかけになった機体なのだから。

十代の後半で中佐にスピード出世したことにより、ついに私は当時ザビ家のキシリア少将クラスしか搭乗できなかったジオン公国最強の巨大戦艦〈グワジン〉の艦長を務める栄誉まで頂いてしまった。

グワジンの外装は美しいワインレッドで塗装され、ジオン公国の紋章が装甲板にゴールドで彫り込まれ、ひたすら豪華絢爛、スラリとした優美なデザインをしている。

ジオン公国の頂点であるデギン・ザビ公王がお乗りになるときにも不遜なことがないよう内装まで豪華絢爛な作り込みがしてあり、ほとんどの床に赤い合成カシミアの絨毯が敷き詰められている。

素晴らしいのは見た目だけではなく、戦艦マゼランをはるかに上回る数の大型メガ粒子砲やミサイルランチャーなどの武装に加え、遠距離からの戦艦の主砲なら簡単に弾く強靱無比な装甲を持つ。

推進スピードも高速戦艦ザンジバル並だ。

三百名の人員がホテル感覚で悠々と搭乗でき、(※船内の重力発生装置も完備でなんとカクテルバーもあるのだ)二十機程度の重モビルスーツなら楽に飲み込める。

つまり攻守共に完璧、おまけに優美という宇宙一の素晴らしい戦艦だ。

これには比較的昇進には冷静だった私もさすがに有頂天になってしまっていた。今思えば本当に取り返しのつかない未熟さだったけれど。

ルカ
ゾーテル
中佐



私がグワジン級大型戦艦2番艦<グワメル>の艦長に就任したその日、うれしさのあまりウキウキ舞い上がった私の肝を潰してくれたのはマゼラン一個艦隊の征伐に向かい、損傷して私のグワジンに飛び込んできた二機のザクmark Iだった。

グワジンは艦首がそのまま艦橋になっている設計のため、そいつらは私の指揮する艦橋を危うくかすめ、主砲が並んでいる甲板を滑走路代わりに不時着したのだった。

巨体のグワジンをも小揺ぎさせる衝撃と艦内に響く不快な摩擦音をしばらく奏でた後に、ようやくザクは停止した。

「損傷してるから操縦しにくいのは判るけど、だからってやっていいことと悪いことがあるでしょう！ 誰か行ってパイロットひきずって来なさい！」

私の怒りが爆発したのは、損傷はしているがそのザク達からはその気になれば、そんな危険な真似をしなくても軟着陸できる、悪質パイロット特有の余裕と悪ふざけの悪意がにじみ出ていたからだった。

所属部隊の識別ビーコンランプも切っており、やましいところ満載の〈確信犯〉だ。部下にひきずられてきたのは見覚えのあるダブル馬鹿だった。

私の馬鹿弟と、その馬鹿を良心的にいつも停めようとするんだけど結局、輪をかけた馬鹿をしでかしてくれる熱血馬鹿男イチロー・ナガイ大尉だった。

「ヒロタカ!! また馬鹿な操縦して! あんたもうパイロットなんか辞めなさい!!」

「やだね。人のせいにするなよな、ハルカ姉ちゃんが操縦しにくいウスノロザコなんか造るから弟の俺がえらい目にあってるだけじゃん、三発しか撃てない核バズーカ以外ロクな武器使えねえしさあ」

ヒロタカ・ソーテル又少尉。

弟鬣《おとうとびいき》する気はないけど、こいつ顔は結構イケてるし、頭も切れれると思う。

だけど誰に似たのか、とにかく口が悪くて言い出したら聞かない命知らずの無鉄砲。

おまけに私以上に運動神経がいいから誰も手が付けられない。

腕が良すぎてモビルスーツの性能を限界まで引き出しすぎて、すぐにおしゃかにしてしまうモビルクラッシャーの異名がある。

そしてイチロー・ナガイ大尉。

重巡洋艦〈チベ〉の使い手として有名な、伯父のコンスコン少将の部隊に所属している腕利きのモビルスーツパイロットで艦隊指揮も上手い前途有望な、私より二つ年上の気のいい男だ。

今回のような合同作戦になると、気が合う私の部隊の弟と連れだって出撃し、ケンカをしてボロボロになった野良猫みたいになってフラフラの様相で二人で帰還してくる。

世話好きで普段は冷静沈着な奴だが、おとなしそうな外見とは裏腹に、根は愚弟に劣らぬ熱血野郎の困ったちゃんだ。

「危険行為と識別ビーコン不使用の罰として、二人とも一日、反省房行きを命じます！

コンスコン少将にナガイ大尉のことは私から伝えておきます」

「うえーっ、人が必死になって戦ってきたのに反省房行きかよっ!? せめて三時間くらいで手打たねえか、身内割引ってもんがあるだろ姉ちゃん？」

「んなもんあるか馬鹿！ 身内だからこそ、他の部下より厳罰に処す必要があるの。

ハイ、これ今日の晩ご飯。持って行って中で食べなさい」

にっこり笑って手持ちのチューブ食を二人に手渡した。

「わお、気が利くねさすが我が姉！ この水色の奴、うめえーんだよな。

マヨネーズ味のバリウム入りマッシュポテトに、ブルーハワイとペパーミント

混ぜたような謎味!! 食べる人間のことなんて考える気がサラサラない味付けなんか

俺に似てもうサイコーー!!」

「そう……かな……?!」

ナガイには私の言いたいことがちゃんと伝わったようだ。もう一方の大喜びしている馬鹿には、なーんにも伝わってないようだけど。

「シロアリだって木を食べるし、パンダだって笹食べるし、あんたがそれ食べて満足してりゃ幸いだわ。まあ明日までゆっくり噛みしめて反省してちょうだい」

「おおよ、そんじゃあ明日の晩まで我が最愛の姉よアデュー！」

「わきゃっ?!」

去り際にあんにゃろ、人の胸を思いっきり揉んでいった。

「相変わらず無駄にでかいな、おっぱい」

「やかましいわ!! さっさと牢屋に行ってすすり泣けっ!!」

思いっきり蹴り飛ばすが、ハッハッハと紙一重で躲かれ、空振りしてしまい、その隙を狙われ軽く軸足を刈られて尻餅をつかされてしまった。

後頭部を壁に打ちかけたが、さりげなくヒロタカに手を入れられて助かった。

「ほんじゃ、すすり泣いてきますわ」

手を挙げてナガイと反省房へ歩いていく。

くっそ～～、スケベで女に手が早いサイテー野郎。ホントにあいつ、私と血がつながってるのか？ あれで女性に結構もてるんだからジオンの女性の質もドン底まで落ちたものだ。

翌日の晩、コンスコン隊の全体演習のため、ナガイ大尉は帰っていった。

ヒロタカは昨日ザクで帰還したとき顔に少し疲労が出ていたが、反省房で惰眠を貪ったらしくコンディション絶好調で戻ってきた。

「いい骨休みさせて頂き、ありがとうございました中佐殿」

にやりと笑う。

「みっともないから無精髭剃って、さっさと持ち場に戻りなさい馬鹿少尉」

だらしなく開いたカッターの襟元のボタンをはめてやり、ブリッジから馬鹿を退去させる。
.....と思ったら近くにいた若い女性レーダー手がホケ〜〜っと髭面に見惚れていた。

こら、そこ！ 相手を選べ。興味を持つな(苦笑)

呆れて軽く舌打ちすると、突然、非常通信のアラーム音と共に、今まで外の宇宙空間を映し出していたグワジンの大型ブリッジモニターが切り替わってドズル中将の顔がアップで映し出された。

「ソーテル又中佐はおるか?!」

「はっ、ドズル閣下」

「そうか、突然呼び出して悪いがトラブルが起きた。済まんが極秘でおまえ達に火消しを頼みたい。それも大至急。重要任務だ、成功の暁には全員二階級特進に褒賞も考えておる」

慣例では二階級特進というのは死者に対して行われるのが常だ。生者に対しては、素晴らしい功績を挙げた者でも極めて短期間のうちに一階級ずつの特進しか行われぬ。

うまい話なんてこの世にはない。

そうした慣例を破る場合といえば、ジオン軍全体に関わる大失態が発生したに決まっている。この場合、火消しに成功すれば公にはされないものの褒賞は多大な物になるが、失敗した場合はリスクも最大級だ。

「二階級.....特進ですか?!」

「そうだ。最もその火消しに選ばれたからには、おまえ達に拒否権はないが」

「でしょうね」

「それで早速トラブルの内容だが――」

大型ブリッジモニターに、建造途中の見慣れないスペースコロニーが写し出された。一応使用可能らしく、一定速度でちゃんと回転している。重力が発生して、中に住んでいる住民達に〈上下感覚〉を与えているはずだ。

サイド1からサイド7まであるスペースコロニーの外見やデータは私の頭の中に全部入っているが、これは私が知らないコロニーだ。

存在するはずがないコロニー.....

人間が居住できる大型スペースコロニーは全長が約四十キロ、直径が八キロ程度の円筒状の物が大半で、少なくとも7つのサイドが完成するまでは協力体制にあった地球連邦とジオン公国が、その総力を結集してもたったの7つまでしか造れなかったという点からしても、いかにコロニーの建造には莫大な時間と費用が必要なのかよくわかる。

そんな数少ない大型スペースコロニーの一つを使い、ザク的能力とジオン公国の底力を見せつけ、地球連邦に早期降伏させるためにスペースコロニーをザクで誘導して地球に落とす〈コロニー落とし〉と呼ばれる悪名高い残虐非道な作戦が数年前に強行実施された。

それは事前のシュミレーションの結果を遙かに超える未曾有の大惨事を巻き起こし、その後起きた各地の異常気象も手伝い、地球の総人口の四分の一を死滅させる恐ろしい結果を招き、そのあまりの無惨さ、大量虐殺ぶりに地球連邦・ジオン双方が震え上がった。

核兵器でもここまではしないと。

そのような経緯から、残された大型コロニーは非常に数少なく、サイド8にあたる新造コロニーの建造も全く見通しが立たない現状のはず。

なのに……

ブリッジモニターには、見慣れない大型スペースコロニーが確かに映っている。

「驚いてるな。俺も今回の不祥事で初めて存在を知ったぐらいだから当然か」

「これは一体?!」

「サイド0（ゼロ）だ」

「サイド0?!」

「0番台のサイド。つまり二分の一サイズでテスト建造されたコロニーだ」

「いきなり実寸で造ったら、万が一失敗した時の損害が大きすぎるからですね」

「うむ。連邦と地球がまだ協力体制のころに、地球と月の間の重力ポイントでこいつを使って実証実験を試みたところ問題がなかったのが、実寸のサイド1の建造に取りかかったわけだ」

「サイド0は用済みになりますね」

「用済みになったサイド0は地球から一番離れたサイド3から、さらに先の宇宙を望むための宇宙基地にするため運ばれた」

「その後、連邦とジオンは戦争状態になりますよね」

「サイド3の目の前のサイド0は当然、我々の物になるから、それを我々は極秘のうちに運んで行ったのだ」

「えっ、どこへですか?!」

「アクシズだ。アクシズだよ。アクシズの建造工事の作業ベースに使ったんだ」

「あのアクシズに！ それはまた、ずいぶん遠くまで運びましたね。前線任務ばかりだと後方情勢に疎くなりがちで申し訳ありません」

アクシズとは簡単に言うとジオン軍の避難場所だ。

さすがに何も考えずにただ、ザク頼りで国力が三十倍の地球連邦に独立戦争を挑んで絶対勝てると思うほどジオン軍も脳天気じゃない。

アクシズは万が一、サイド3が落ちた場合にも逃げ延びて再起が図れるよう準備した、サイド3のはるか後方、木星近辺にある、重力を持った超大型の小惑星を開拓したジオン軍最後の砦……最終避難場所だ。

今はほぼ無人だが、アクシズは都市機能を持った一つの〈巨大要塞国家〉といっても過言ではない。物資が不足している昨今ですら戦争には回さず、着々と宇宙艦艇や武器弾薬、重モビルスーツ、大型モビルアーマーの備蓄が進行している。

「現在アクシズの建造工事が完了して、工事関係者もサイド0から引き揚げて、最近まで無人になっていたが、ここでトラブルが起きた」

「トラブル?!」

「ああ。腰抜けのジオン公国総議会メンバー共を我々ザビ家が完全に掌握したと思っておったんだが、メンバーの中にとんでもない過激派の連中がいてな」

「とっても嫌な予感がします」

本当に嫌な予感がして私は苦笑した。

「予感的中だよソーテルヌ。メンバーの連中がこう言い出しよった。『コロニーを落とされてあれほど大打撃を受けたにも関わらず、捕虜のレビル将軍を取り戻したせいで連邦軍はまた調子にのり始めた。コロニーをもう一度落として今度こそ息の根を止めてやろう』と」

「なんですって?!」

「もちろんおやじ殿(デギン・ザビ公王)は、前回のコロニー落としの時の兄者……ギレン大将同様に猛反対したよ。あれだけやればもう充分だ、まだ気が済まんのか!!と」

「顔に似合わず穏健派の優しい方だから」

思わず口が滑ってぼそとつぶやいてしまった。

「何か言ったか？」

「いえ、なにも」

「ん。だが親父に隠れてその馬鹿共、自前の技術者を使って、なんとサイド0を地球に向けて加速させおった!!」

「な……っ!! なんて馬鹿な真似を！ 狂ってる！」

「最初はゆっくりだったので止められると思ったのだが、奴らサイド0に様々な仕掛けを施しておって徐々に加速がついてきている。なにせあの大きさ、質量だ。手がつけられない」

「現在、どの地点まで向かっているんですか?!」

「月の裏側、サイド3付近を超高速で通過したと先ほど報告があった。ムサイとザンジバルの一個艦隊で砲撃してみたが、なぜかたいした手応えもなく振り切られた」

「一個艦隊の砲撃でもほぼ無傷……？」

たかがコロニーを一個艦隊使っても大破できない？ なぜ？

「過激派メンバー共や技術者共は全て処分してやったが、既に手遅れだ。

サイド0は奴らの悪意だけで地球に向かって加速しておるわ」

「つまり我々にサイド0の地球降下阻止を依頼されるわけですね」

「そうだ。さすがにサイド0を地球に落とすわけにはいかん。仮に我々がこの件で地球に勝利しても今度こそザビ家に大量虐殺者の汚名がかかって民衆の猛反発を喰らうわ、壊滅した地球全土しか残らないわでは、なんの利もない」

「確かに」

「前回我々はアメリカ大陸及びオーストラリア大陸一帯の壊滅を狙ったので、奴ら、今回はチャイナとジャポンのトヤマケン付近の海に落下させるコースでアジア並びユーロ圏一帯を壊滅させる計画だったらしい」

「うわっ、ジャポンのトヤマケンって言ったらナガイの出身地じゃないの！
なんて運の悪い奴！」

「俺の艦隊にシャアの部隊、コンスコンの部隊で、邪魔になりそうな連邦軍の艦隊はひきつけて時間稼ぎするから、おまえのグワジンが実働隊になり、なんとしてもサイド0を止めろ。いいな！」

「かしこまりましたドズル閣下！」

「参考データはそちらのスーパーコンピューターに送った。たのんだぞ、成功を期待する」

「はっ！」

敬礼する。

ブリッジモニターからドズル中将の顔が消え、外の宇宙空間の画像に戻る。

「大変なことになっちゃったな。夢のグワジンに就任早々ー大事なんて……」

ドズル中将の前で虚勢を張ってみたものの、顔が青ざめている。

「なあ～～に、めげてんのハルカ姉ちゃん。話は聞いたよ。さっさと行って片付けようぜ」

「ヒロタカ！」

正直、就任したばかりでまだブリッジメンバーにも慣れていないのに、一大事が降りかかり正直参っていたところ、愚弟とはいえ、身内がそばにいてくれるのは、精神的にとっても心強かった。

不安を紛らわせたかったんだろう、無意識に側に寄ってヒロタカの制服の袖を掴んでいた。
駄目なお姉ちゃんだ。

日頃馬鹿だサイテーだとさんざん罵っておきながら、困ったら頼ろうとしている。

サイテーなのは私の方だ。

「ほら、みんな姉ちゃんの指示待ってるよ。中佐で無敵のグワジンの艦長様だ、なに怖ってるんだ？」

「でも……」

「ハルカ姉ちゃんは頭とスタイルだけが取り柄だろ？ やっこさんの前に出ていきゃあ、なんか思いつくさ」

ポンと肩をたたく。

「うっさい馬鹿、頭とスタイルだけって何よ?! わかったわよ行けばいいんでしょ
行けば……」

「そうそう」

ニシシと笑う馬鹿。

軍帽につけた艦内放送用インカムを口元にもっていき、指示を出す。

「ゴホン、艦長のハルカ・ソーテル又中佐です、みんなよく聞いて。本艦は現在、地球に向かってるスペースコロニー〈サイド0〉の落下を阻止する特命をドズル中将より受けました。よってこれよりただちにサイド0の正面位置に急行します。機関全速前進!! 技術関連関係者は、すぐに作戦会議室へ集まること。以上!!」

優雅な艦内の雰囲気に乗組員は慣れ親しんできたのだろう、寝耳に水の事態にグワジン艦内が騒然となる。

「やっとエンジンかかってきたな。ところで姉ちゃんちょっと頼みがあるんだけどさ」

「なにね? 忙しくなってきたから手短かに言いなさいよ」

「今、テストやってるだろ、姉ちゃんが調整してる新型のザクmark IIって奴。あれ回してくんねえか」

「mark IIを?! あれはまだ駄目よ。全体的に性能上げた分、熱冷却の問題が残ってて、動力パイプを外に剥きだしにして自然冷却に頼ってる位なんだから。mark I以上に不完全なのよアレ」

「コロニー落とすの時にも少し数出してたじゃん。多少のボロは目つぶるから頼むよ。機械のことはよくわかんねえけどmark Iじゃ最近の俺についてこれないんだわ」

「う〜ん、わかった手配しとく。でもホントまだ不完全だから使ってみて手に負えなくなってきたら、無茶しないでmark Iにすぐ乗り換えるのよ、いい?」

こいつには釘刺しとかなないと心配で心配でたまんない。

「わかってるって」

ヒロタカと別れた私は作戦会議室へ急いだ。

作戦会議室では、各方面の技術関係から代表者が二十名ほど集まってざわついていた。

大画面モニターを背に、席に着いた私は会議の開始を宣言する。

「先ほどの放送でお話ししたように、みんなにはサイド0を止める対策を考えて頂きたいと思います。手段は選びません。破壊もやむなしです。シオザワ技術士官」

「はっ、それでは」

サイド0の全表面を覆うキラキラしたソーラー電池付強化ガラスと太陽光線収集用ミラーがモニターに写る。

「ソーテル又中佐がここに来られる前に、我々でも対策を考えておりました。

それについてご説明します」

「サイド0の表面を覆うガラス。これって弱そうに見えるけど相当な強度があるんでしょ?」

「はい。外宇宙から超スピードで飛来するスペースデブリ(ゴミ)に耐えるため、超硬質処理が施してあります」

「でも、私が腑に落ちないのはムサイとザンジバルの一斉砲撃で

たいしたダメージがないってことなのよ。なんでだろ？」

サイド0をムサイとザンジバルの一個艦隊が砲撃しているビデオをモニターに映す。

「いくら超硬質ガラスといえど宇宙戦艦のメガ粒子砲や大口徑主砲弾、高性能ミサイルの直撃には普通は耐えられません」

「てことは普通じゃない仕掛けがある？」

「そうです。地球落下を妨害されることを予測して死ぬ前に技術者達が施した仕掛けが少なくとも二つほど見受けられます」

「手回しのいい馬鹿たちね！」

「ええまったく。で、その第一の仕掛けが、ミノフスキークラフト効果を生じさせて一種のバリアーをコロニー全体に展開させる装置です。現在開発中のモビルアーマー〈ビク・ザム〉に使われているバリアーの大型版と考えて頂くとわかりやすいでしょう」

「でもあれはエネルギー消費が莫大すぎて長時間使えないはずじゃ……」

「中佐、敵はコロニーです。太陽エネルギーが無尽蔵に使えます」

「あっ、そうか忘れてた！ それで一斉射撃が効かなかったワケね！」

「このバリアで艦砲射撃の大部分は防げますが、それでも防ぎきれずにコロニー内に飛び込む砲弾やミサイルもありますが、それをコロニー内で何者かが全て排除しているようです。それが第二の仕掛けです」

「何者かってなに？」

「わたしの推測ですが、生物反応がないコロニーですので、おそらくコロニー内でコンピューター制御のザクの無人機を使い、ミノフスキーバリア発生機の監視警護に当たらせていると思います」

「ザクの無人機……、妙なこと思いつくわね」

「連邦軍でもオートパイロットの研究は進んでいます。ましてジオンにできないはずがありません」

「そうか……。わかった。ありがとう」

腕組みしてちょっとうつむいて考えてみる。

そんな仕掛けがあったらグワジンの全力艦砲射撃でも 多分歯が立たない。

相手は全長二十キロの怪物だ。いくら一隻で一個艦隊に迫る破壊力があっても大型戦艦一隻とコロニーではエネルギー生産量が違いすぎる。

でも中の護りが無人機ね……

ピン！ときた。

「そうか、あの手を使ってみるか」

「なにか思いつきましたか中佐」

「うん、ちょっとね。みんなありがとう。もういいわ、持ち場に戻ってちょうだい。解散！」

ブリッジにもどり艦長席に着いた私は、必要な戦力を招集するため各方面に伝令を飛ばした。

本当はナガイのいるコンスコン隊から支援が欲しかったが、今回の任務はジオン軍の手綱が緩んで起きた不祥事なので、出来る限り内密のうちに処理する必要があったため、やむなくあきらめ結局ルナツー方面に都合良く停留していた軽巡洋艦ムサイ五隻を自分の元に呼び寄せた。

とりあえず最低限の予備戦力は確保できた。

「あとはコロニーの中にいるらしい無人ザクの始末ね」

短期決戦が得意で近場にいるスゴ腕のモビルスーツパイロットといえば……

「私しかいないじゃん！」

いや、心当たりがもう一人いるが、そいつはこういう危険な任務に一番使いたくない馬鹿野郎だ。

「ハルカ姉ちゃんは指揮に決まってるだろが。餅は餅屋にまかせとけて」

呼んでないのに、いつの間にか心当たりが横にいた。

「あ、あんたなんか呼んでないわよ。何しにきたの！」

「mark II、試したけどアレなかなかいけるぜ。気に喰わねえトコもわんさかあるけどmark Iよりずっと使えるわ。さすが姉ちゃんだ」

「mark IIなんか乗らなくていい！ 独房でも行って寝てなさい！」

「独房は出たばかりだ」

「馬鹿は何回でも行けばいいの!!」

なに言ってるんだろ私。

「技術士官の女の子から聞いた。なんか、無人のザクが中にあるんだろ。」

そいつを片付けねえと、どうにもならねえとか」

「なんつー、口の軽い女」

「姉ちゃん大丈夫、俺が行って片付ける」

ヒロタカらしくない真剣な目で見つめてくる。

「相手は加速Gなんか全然感じない、

操縦席に直結したコンピューター操縦の無人機よ、

あんた そんな奴相手に今まで戦ったことあるの!？」

「ねえよ。けど人の痛みも感情もわからねえ奴に負けねえよ」

「ヒロタカ……」

「いつでも出撃できるよう格納庫で待機しとく。好きなときに指示してくれ」

後ろを振り向かず足早に格納庫へ向かう。

「ヒロタカちょ、ちょっと、待ち……」

「中佐、サイド0 正面、到着しました。次のご指示を!!」

「わ、わかったわ! 主砲の射程距離内にサイド0を収めたら、そのまま待機!」

見てなさいよ狂った亡者共!!

地球は荒らさせない!!

大量虐殺なんて許さない!!

あんた達のコロニー、

必ず私が止めてやる!!

作戦開始だ!!

サイド0をズームアップしたモニターで目の前にする。

漆黒の宇宙に浮かんだ超硬質ガラスで造られた

全長約二十キロ 直径四キロの美しい円筒。

それを狂った亡者が難攻不落の死の爆弾に変えてしまった。

「シオザワ技術士官を呼び出して!」

「はい中佐」

オペレーターに命じるとしばらくしてシオザワ技術士官がモニターに顔を見せた。

「なんでしょう中佐」

「確認したいことがあるの。サイド0で金属で出ている一番固いところってどこ?」

「やはり骨組み(フレーム)と中心軸部分、艦艇が出入りする進入ゲート部分でしょう。

それも封鎖ハッチなどは最も強固かと」

「過去にそれを破って進入した艦艇の記録は?」

「サイド1から7までそのようなことをした前例はありません。ムサイの中型メガ粒子砲も通じない超マイクロ鋼の封鎖ハッチを破るくらいなら超硬質ガラスの側面をミサイル一発で破った方が楽に進入できるからです」

「なら、そこはミノフスキーバリアーの防御はないわね」

「ないです。封鎖ハッチで閉鎖されています。防御する必要がないからです」

「やっぱりね！ 決めた!! 金属製で丈夫だと思ってるから隙ができてる！

そこからグワジンで強引に中に進入する！ 中と外から全力で一斉艦砲射撃してやれば
いくらサイド0でもおしまいでしょ!？」

「なるほど良いアイデアです…… ミノフスキーバリアの〈無限の防御〉がない点を
突くわけですね。ですが超マイクロ鋼のハッチ、果たして敗れますかな？」

「ジオン軍最強の戦艦グワジンの一点集中攻撃で破れないものなんかないわ！

ぶち抜いてやる！ 操舵長、サイド0進入ゲート正面へ急速移動！」

「はっ!!」

「これよりサイド0封鎖ハッチを破壊してグワジンは内部に突入する。

前方主砲塔メガ粒子砲撃手、グワジンの動力エネルギーの70%を使用許可する。

一点集中攻撃でなにが何でも撃ち破れ!! その他、前方に向けられる砲座やミサイル
全て一斉発射準備！」

「了解!!」 「了解!!」

各部署から緊張した応答が返ってくる。

きっかり二分後、グワジンはサイド0進入ゲート正面に着いた。

「用意!!」

艦内に緊張が走る。

「撃て!!」

前方に向けて素早く手を下ろす。

それを合図に恐ろしい大きさの砲弾と大容量のビームが炸裂する。

戦艦グワジンが始めてみせた全力の一斉射撃だ。

無音の宇宙空間と違い、艦内は爆音・轟音・振動が渦巻いている。

主砲塔に近い艦橋にもそれらが津波のように押し寄せる。

五分間の非常識で猛烈な火力の集中により、さすがの封鎖ハッチも
ズタズタに引き裂かれた。

これが連邦軍の戦艦マゼランなら三隻は沈めているに違いない。

「よし、ハッチは破った！ これよりコロニーに突入する。微速前進!!」

「ちょっと待った!! いくらグワジンでも身動きができないコロニー内で、
高機動のザク相手は分が悪い」

「問題ない、無人ザクなんか進入がてらグワジンで蹴散らしてやるから！」

「駄目だ！ 俺が先に行って露払いする。姉ちゃん達は後で入るんだ！」

3. 銀色の巨人

「でも……」

「俺のことは嫌っても信用してくれなくてもいいから、腕の方は信用してくれよ」

「違う!! 嫌ってない! 信用してる! でも……」

ドウウウーーン!!

いつものように、私の言うことには聞く耳持たず、あの子はmark IIで出撃していった。

そして、いつものように私はそれを見守ることだけしかできなかった。

3. 銀色の巨人

〈それ〉はコロニーのちょうど真ん中あたりの空中で、スラスターを使って静止していた。

侵入者が――ヒロタカが来るのをずっと待っていたかのように、

消灯していた一つ目が不気味なピンク色に光る。

〈それ〉は私やヒロタカが予想していた相手、ザクとはまるで違っていた。

確かに人型の鉄の巨人……モビルスーツだが、巨人というより

全長三十メートル以上はあろうかという大巨人だった。

全くの無塗装で全身はシルバーの金属地のまま。

特徴のある一つ目でジオン軍の重モビルスーツと判るが、両耳に角のようなレーダーアンテナ(?)があり口元には小型のメガ粒子砲らしき砲門が一つ、両腕の五本の手の指が全てメガ粒子砲、腰にも二つのメガ粒子砲、計十三門のメガ粒子砲を備えた目の前の敵を火力で殲滅することだけに特化した機種らしい。

ザクのように汎用性を持たせることなど一切考慮しない潔さはあっぱれだ。

名もない極秘開発の試作機らしいが、こんなモビルスーツが開発されていたことなどもちろん私は知らない。

「おいおい、ハルカねえちゃん、聞いてねえぞ無人機のザクじゃなかったのかよ、超ヘビー級じゃねえか!! 話が違うだろ、おい!!」

ザクの通信画像でヒロタカのビックリ仰天、焦った顔が艦橋の大画面モニターに、どアップで写る。

「強そうで大きいわね。ザクが十八メートルで〈それ〉が二十八メートルとしたら十メートルくらいの差かしら？」

「かしら? じゃねえよ、かしらじゃ! 想定外だこんなの!」

「私もよ! 露払いしてくれるんでしょ? カッコよく出てったけどどうすんのよあんだ?!」

「どうすんのか考えるのが姉ちゃんの役目だろーがよ!」

見苦しい兄弟ゲンカのせいでブリッジにあきれた空気が漂う。

「ヒロタカ、手持ちの武器は?!」

「新兵器のザクマシンガンが一、ヒート・ホーク(斧)一、目くらましのクラッカーが二」

「核バズーカはないの?!」

「南極条約で使用禁止になって廃棄されちゃった！」

「ま、まあいいわ戦ってみなさい。あのメガ粒子砲に見えるのも、ただの機関砲かも」

「うそつけ！ 第一、機関砲でも十三門あったら危なくて近寄れねえつうーの!!」

ビシューウー———ッ!!

超高熱を帯びた重金属の粒子を加速させて撃ち出すメガ粒子砲特有のビーム音だ。

「うわととと、あぶねえっ!!」

シルバーの大巨人が口から放ったビームは、なんとか躲したヒロタカの横を通過してコロニーの壁面に大きな風穴を開けた。

大穴は緊急隔壁でかろうじて塞がれたが破壊力は機関砲と比較にならない。

「なんだよこれっ、ムサイの主砲並みの威力じゃねえか！」

「う〜〜ん、私なら逃げ帰るな」

「俺だって、逃げ帰りにえよ！」

「でもね、おそらくー」

ビシューウー———ッ!!

ビシューウー———ッ!!

ビシューウー———ッ!!

私の言葉を遮るようにシルバーの大巨人は指のメガ粒子砲を三連射した後、全弾、ヒロタカに躲されたのを見るとぴたりと停止した。

両足と背中のスラスターをふかしながら、ゆっくり地上に降り立つと半身の姿勢になり、ヒロタカのザクを見上げた。

「なんだ、あいつ?! 砲撃をやめやがった」

「おそらく砲撃はすぐにやめると思うわ。コロニー内で使うには強力すぎるのよ武装が。コロニーを地球に落とす前に自分で破壊してしまったら意味ないでしょ。あの巨人を動かしてるコンピュータは徹底的にドライな奴よ、気をつけて！」

「ああ、ドライでクソ生意気な奴だ」

大巨人は腕を前に出すと、あまり曲がらない人差し指でチョイチョイと手招きした後、親指を地面に向けた。

「地上での格闘戦がお望みらしいわよ」

「あのくそでかい足は伊達じゃねえってわけか、おもしれえ！」

ヒロタカはザクを地上に降ろし、脇にザクマシンガンを放った。

「さてと、お手並み拝見といこうか？」

大巨人と同じく半身の構えにして、ザクを格闘戦の姿勢にもっていく。

マーシャルアーツ(軍用格闘術)を使う気だ。

もう、どうあがいても死闘は避けられそうにない……

4. 死闘

4. 死闘

完全に見誤っていた。

スペースコロニー・サイド0の守護者、銀色の大巨人の大きさとパワーを。

私は遠くから見て三十メートル程度と目測していたが、大巨人の至近距離に近づいたヒロタカのザクmark II に設置された戦術コンピュータから送られてくる詳細な分析データは恐ろしい数値を示していた。

- ・全長三十九メートル。ザクのちょうど二倍。
- ・推定重量約二百四十トン。ザクの約五倍。
- ・熱排気、その他から推測されるパワーはザクの二倍以上。
- ・スラスターの推進力なら八倍以上。

つまり、ザクmark II のまるまる二倍以上の体躯を持った強敵だということだ。

この危機的状況を例えるなら十二歳の女の子が、立ち上がった飢える巨大グマと鉢合わせしてしまった感じだろうか。

大巨人の指はメガ粒子砲を兼ねているので上手く曲がらず、武器も掴めないため、ザクmark II と比べ接近戦の場合には状況に応じた対応力では劣る。

拳も握れないため、繰り出すのはどうしても無造作な突きのみになるが、恐ろしいパワーに重量が加わった超スピードの突きが繰り出せるなら、それがどれだけのハンディになるというのか？

「ちいっ、こんな馬鹿でかい奴とは思わなかったよ、こっちの頭の位置が奴の腹のあたりって、どんな差だよ！」

大巨人の腹の部分に、思いっきり殴りかかり十数発ヒットしているのだが、まるで歯が立たない。

装甲は同じ超硬質スチール合金製だが、相手の装甲が厚いからというより、単純に機体の大きさと重量が違いすぎるので通じないわけだ。

無防備で正面を向いていた大巨人は、

「お嬢ちゃん、もう気が済んだかい？ そろそろこちらもやらせてもらおうか」

というように、半身の姿勢になり、高速で右足を後方に下げた。

「ヒロタカ、回し蹴りよ、くる!!」

「判ってる、延髄切りかなんかだ」

図体が大きくオーバーアクションなので何を仕掛けようとしているのかおおよそ判る。

が、それが判っていても避けられない爆発的なパワーと重量が乗った、とてつもなく重い回し蹴りだった。

グワーーーーン!!

防御した左腕のブロックが一瞬で弾かれ、ザクの後頭部を狙った大巨人の右足が突き刺さる。

口につながる動力パイプを蹴り千切られ、ヒロタカのザクは三回転ほどしてすっ飛び、付近のビルや住宅を十軒ほどなぎ倒してようやく止まった。

「げ、げふっ……！」

物凄い衝撃を受け、瞬間的にかかる強烈なGからヒロタカを護ろうとヘルメットや与圧服、シートベルト、衝撃緩和シートの四点セットが懸命に働いたが、そのカバーですら防ぎきれ無かった。

バイザーが吐いた血で染まる。

「ヒロタカっ!!」

「くっ……! や、やるな……、メ、メインカメラはまだ、イカれてないか。頭は、つながって、るようだ……」

「大丈夫!？」

「なんとかな…… 連邦にはモビルスーツがないから、どうしても演習試合はザクとの模擬戦闘になるけどこんな強い奴、相手にしたことないぜ。姉ちゃんこの位強い奴造って乗せてくれよ」

「こんな大きすぎて艦艇にも載せられない、採算度外視の規格外決戦兵器みたいなもの量産したら国が傾きますっ！」

「ソーテル又中佐。おとりこみ中、申し訳ありません」

「どうしたの?!」

老練で冷静沉着さに定評があるトシオ・フルカワ少佐が深刻な表情で話しかけてきた。

「サイド0が地球の重力圏の影響を受け始めました。加速が増しています。

ヒロタカ少尉にあの無人機を早く始末して頂かないとー」

「無理は承知の上でね」

「はい」

「そういうことよ、ヒロタカなんとかしないと……」

「なんとかって、どうすんだよこいつ?!」

蹴り飛ばされ、倒れてまだフラフラ状態のヒロタカのザクの目前へ、瞬間移動をしたかの様に現れた大巨人は、ザクの胸を串刺しにしようと、AIコンピューターに記録された武術の達人の突きを再現するかの様に超スピードの無慈悲な突きを繰り出してきた。

ザクの胸は右がミノフスキー核融合炉、左がコクピットでどちらも大穴を開けられれば致命傷だ。

機体を寝転がして必死に躲すが、掠っただけでザクの右肩の分厚いシールドがバターのようにはかれていく。

「くそ、図体がデカイくせになんて素早いんだ！ おまけにこっちは動力パイプを蹴り千切られたせいか動きが鈍くなってきた。今度から造るモビルスーツはやっぱりパイプは内蔵型に戻したほうがいいぞ姉ちゃん」

「そ、そうするから、なんとか倒して戻ってきて！」

余裕のあるふりをして批評なんかしているが、足下のフットペダルの踏み込みや手元のレバー操作のスピードは超人クラス。そこまでしないと、あの無人機の反応速度についていけないってことだ。

「空中戦駄目、格闘戦も歯が立たないってんじゃ、何か奴が持ってない凄い武器でもないかー」

「凄い武器……」

目の前で今にも死にそうな愚弟にハラハラさせられて頭が回らなかったが、言われてみて我に返り、やっと頭がフル回転で回り始めた。

現状確認とこちらの利点をもう一度検討する――――

まずヒート・ホークで向かっていけば、今度こそ全開パワーで腕ごと蹴り千切られるだろう。

次に格闘戦をやめてザクマシンガンに切り替えたとする。

A Iの危険度判定がアップしてしまい、今までコロニーの崩壊につながるからあえて使うのを止めていたメガ粒子砲一三門を再度使わせてしまうことになる。

そうなったら一巻の終わり。

ある意味舐めてかかっている、地上戦の今倒さない限り勝機はゼロだ。

残るはクラッカーによる一時的な目眩まし。

これは非常に有効だ。

ミノフスキークラフトバリアーを発生させる装置があちこちに設置されているから、コロニーの中はミノフスキー粒子で充ち満ちている。

それで巨人のレーダーは使用不可能だから、現在モノアイの光学センサーや聴覚センサーに頼っているはずだが、クラッカーは使用すれば光学センサーを麻痺させる大光量の光と聴覚センサーを狂わす音波を同時に発生させるから四十秒程度、敵を行動不能にできる。

もちろんその間に攻撃して破壊するなんて真似ができないのは今の戦いで実証済みなので、ここは逃げの一手を決め込み、形勢立て直しを図るしかない。

「ヒロタカ、クラッカーよ！ クラッカー使って逃げて！ 場所は私が指示するから!!」

「わかった、よーし、喰らえデカブツ!!」

大振り腕を上げた大巨人の僅かな隙を狙って目の前にクラッカーを叩きつける。

バシュッ!! ズバババババ〜〜〜ッ!!

クラッカーに怯み、ふらついた大巨人の攻撃から抜け出したヒロタカのザクは一目散に走って逃げ出した。

一見モタモタと走っているように見えるが、全長十八メートルのモビルスーツだから歩幅があるので時速八十キロ程度のスピードは出ている。

どこへ逃げ込むかだが、コンピューターに登録されたサイド0のデータマップを操作して現在地から東西南北、四十秒間にザクで移動できる範囲にある地形や建物を片っ端からはじき出す。

コロニーの内側に建設されているため、海や空港こそないが、ハイウェイに山や湖、工場に住宅、ショッピングモールに遊園地、牧場といった、およそ人間が快適に暮らすのに必要な設備は全て揃っている。

その中で、私は一番近くにあった巨大な工場――〈プラモデル工場〉にヒロタカを誘導することに決めた。

「近くに〈パンタイ〉の工場があるでしょう、そこの重化学プラントへ逃げて！」

「ああ、すぐ近くにあるな。プラモ工場か、よしわかった！」

ザクを全速で走らせ、プラモデル工場の重化学プラントに向かわせた。

クラッカーに怯んでいた大巨人もセンサー類の自動修正が終了し、クラッカーの効力が失せるのと同時に、すぐプラモデル工場へ向かってきた。

軽くスラスターを効かせて機体を浮かせ、突進する。

もちろん小走り程度のつもりだろうが瞬間的に時速六百キロを超える。

風圧で近くにあった樹木や簡単なプレハブ住宅が根こそぎひき裂かれる。

「奴が来たわよ、残ったもう一個のクラッカーを持って、重化学プラントのプラスチック製造棟へ急ぎなさい！」

「了解！」

ヒロタカのザクがプラスチック製造棟に着いたのと、大巨人が到着したのはほぼ同時だった。

到着地点を予想し、最短ルートでやってきたのだろう、無人とはいえ周りの施設は全て薙ぎ倒されていた。

スラスターでしばらく浮いていた大巨人はまた地上に降りて、〈もう逃げられはしない〉とこちらを睨むように仁王立ちになった。

心理的に恐怖感を与えるための間をわざとにおいてプレッシャーを与えている。
大巨人のA1はコロニーを地球衝突まで維持することと、確定ターゲットを
殲滅することのみに徹した殺戮マシンだった。

「ヒロタカ、左へ五十メートル、停まれというまで少しずつ移動して！」

「わかった！」

じわりじわりと左へザクを移動する。

それを察知して、自分も右へ少しずつ移動して対面する状態を
崩そうとしない大巨人。

そうこうしているうちに、全高百メートルはあろうかという円筒のタンクが
七つズラリと並ぶ位置まで大巨人が移動した。

「よし、いいわよ停まって！」

「そうか、わかったぞハルカ姉ちゃん！ タンクの前に誘導して、奴に煮えたぎる
プラスチックでもぶっかけて動きを鈍くするか、ガスタンクでも打ち抜いて
爆風で破壊するつもりだな!? それとも無塗装だから薬品でも浴びせて
錆びさせるとか(笑)」

「あんたこの期に及んでホントに馬鹿ね、あいつのパワーや推進力見たでしょ!?
プラスチックが多少冷えて固まろうがそんなもん、なんのクサリにもならないわ!
それにガスタンクなんて爆発させたらあいつより、あんたの方が先に巻き込まれて
お陀仏でしょが? 薬品を浴びせる!? 濃硫酸だろうと濃硝酸だろうと、
あいつがボロボロになって動けなくなるまで悠長に待ってられないわよ、
地球にもうすぐこのコロニーが落ちるって時に」

「なら、どうすんだよ!？」

「今、奴がちょうどNO.4のタンクの前に来てるわね。そのタンクの
高さ六十五メートルあたりのところへクラッカーを思いっきり
投げ込んでブチ抜いて!!」

「えっ!? いいけど、なんか浴びせるのは無駄だって今言っただろ？」

「浴びせるのは無駄とは言ってないわよ。ほら早く投げて！」

「よくわかんねえけどハイハイ、よっと!!」

ザクに思いっきり投げつけられたクラッカーはタンクを軽くぶち抜いた。

その穴から透明な液体が滝のように噴き出し、下にいる大巨人に降りかかる。

無論、それが人間にとって猛毒の薬品だろうが強酸だろうが効くわけがないので大量に浴びても全く委細かまわず、こちらを睨みつけたままだ。

クラッカーを投げられてもセンサー調整済みなので次からは効かないし、自分以外の見当違いの方向に投擲されたものなので全く無視だ。

「よーし、かかった!! 今よ! ヒロタカ、ヒート・ホークでその液体に軽く触れなさい!」

「えっ? ああ、了解!」

ヒロタカが近くに降ってきた液体に、熱を通したヒート・ホークで軽く触れるとひき放たれた矢のように炎がタンクと大巨人に伝わり、大爆発を起こした。

さしもの大巨人―― AI にも突然何が起こったかわからず、わからないままに連続する大爆発で、損傷を被っている。

「うわーっ!! なんだ、これは!?!」

「あははは、いくら大巨人でも、機体の隙間から内側に染みこんだ〈液体爆薬〉には勝てないでしょ!?!」

笑う私に、ついてこれないヒロタカが聞いてくる。

「〈液体爆薬〉? なんでそんなもんがプラモ工場に!?!」

「わかんない? 〈液体爆薬〉…… ガソリンよ。プラモデルの原料のプラスチックペレット(粒)の原料って何?」

「石油だろ。……そうか! プラントで重油、軽油、ガソリンいろいろに精製して分離したものをこのタンクで貯蔵してたのか!」

「そう。ヒロタカのザクと戦ったり、スラスターふかしてここまでやってきたんだもん。冷却用の吸排気口とか当然開けてるでしょ。そこへガソリンなんか浴びたらそれはもう、身体の中に液体爆薬を入れたようなものよ。機体の中なんて、どんなモビルスーツでも無防備だからひとたまりもないわ」

「なるほどね。俺とザクを殺すだけしか眼中なかったもんな、あの AI。

人間のパイロットなら、少しは周りの状況に注意したり、身を守ろうとかするもんだけど、痛みも自分の危険も考慮に入れない、プログラムされた任務遂行しかできなかったのが命取りになったわけか」

仁王立ちだった大巨人は爆炎の中、崩れ落ちて両ヒザ立ちになってもがいていた。

「了解、今——」

ヒロタカがザクを振り返らせ、グワジンに向けてスラスターをふかしてジャンプをしようと機体を屈ませた瞬間、大巨人のモノアイが突然点灯し、胴体から大巨人の頭部が鋭い加速で飛び出した。

「——戻らねえよ!」

頭部にある予備AⅠの起動をヒロタカの勘は一瞬早く察知していた。

「てめえの考えなんざ見え見えだ! 消し飛べAⅠ野郎!!」

すでに空中高く飛び上がり、機体を横倒しに傾け、空中でボールを蹴るサッカー選手の様な姿勢になりながら、ザクの左足で大巨人の頭部を蹴り飛ばしている。

が、ザクの左足が頭部にヒットした瞬間、頭部の口部分に仕掛けられたメガ粒子砲が火を噴いた。

灼熱した重金属粒子のビームが、熱したフライパンに入れたバターのようにザクの左足をドロドロに溶かしていく。

ビームは勢いを落とさず、そのまま一直線にザクの頭部をも撃ち抜いた。

「うおおおおおおお——っ!」

それでもヒロタカのザクはドロドロに溶けていく左足を最後まで振りきり、大巨人の頭部を蹴り潰して破壊した。

頭部をメガ粒子砲で撃ち抜かれ、姿勢も崩れたザクは空中で機能停止し、燃えさかる大巨人の胴体に向かって落下する。

地上に落下したザクの機体と激しく衝突した大巨人の胴体は、その拍子に機体のどこかにあったプロペラントタンクに穴を開けてしまったのだろう、プロペラントに炎が引火し、ついに大巨人は大爆発を起こして四散した。

衝突の勢いと爆発に巻き込まれ、左腕と両足が千切れ飛び、ふき飛んだザクはゴミのように転がり、工場を三、四棟倒して停止する。

「ヒロタカー——っ!!」

ザクmarkⅡから送信されてくる音声や画像にノイズが混じり、ひどく荒れて見づらい。

コクピット内の映像やデータを送信してくるザクmarkⅡの無線装置は頑丈で壊れにくいことに定評がある。

機体の中で一番頑丈な装甲板でコクピットは囲まれており、そのパイロットシートの背もたれ部分に無線装置が仕込まれていれば壊れにくいのは当然だ。

そんな損傷しにくい場所から送られてくる画像がここまで荒れているなんて、画像なんか見なくてもコクピットが今どんな状況なのか、設計に携わった私には嫌でもわかってしまう。

顔から急速に血の気が引いていくのを感じながら、次々と頭に浮かぶ悪い想像を必死に振り払い、作り笑顔を浮かべて懸命に呼びかける。

「ヒロタカ!! ヒロタカ!! ヒロタカ!!」

何回、何十回、名前を呼んだだろう。

「.....ヒロタカ、ヒロタカうるせえ.....」

かすれて元気はないが、いつも通りのかわいげのない返事が返ってきた。

「ヒロタカ、良かった.....！ 死んじゃったかと思った.....」

「まだだ。まだ少し用事がある。終われねえ」

「終わったわよ！ あいつも倒したし、すぐにあんたの救援に行くから！」

「来るな！ 奴を倒すのに時間をかけすぎた.....俺よりコロニーを潰す方が先だ！

姉ちゃんはグワジンに自動射撃と自爆プログラムをセットして、乗組員を早く待避させろ！

地球に近づきすぎたら終わり.....だ、時間がねえ！」

「何いってんの！ 使いを出してでも助けに——」

「もう.....無駄.....だ。シートベルトが全部ちぎれて頑丈なシートに収まった無線が荒れてるんだ。俺がどんな状態か.....判るだろ？」

内蔵の一部が破裂して、大きな破片が何個か身体を貫通してシートに突き刺さり、訓練していない一般人ならショック死してる状態..... そんなの判りたくない!!

堪えていた涙があふれる。

「最後にコロニーの中の.....バリア発生機を全部ぶち壊してやる。姉ちゃんあと頼んだ」

背中にあるランドセルと呼ばれる巨大なスラスタパックと、機体に備え付けられた姿勢制御のスラスタを全部使って右腕と胴体だけになってしまったザクをふらふらと浮上させ、さっき投げ出したザクマシンガンを回収し、コロニーの数カ所に設置されたミノフスキーラフトバリア発生装置に向かう。

機動戦士ガンダム サイドアナライズ ストーリーVOL2 につづく

機動戦士ガンダム サイド アナライズ ストーリー 仮想対談 その1.声優さん

脳内声のイメージ(笑)

※ナレーション	永井 一郎さん(笑)
※ハルカ・ソーテル又少将	堀江 由衣さん
※イチロー・ナガイ中佐	神谷 浩史さん
※トシオ・フルカワ少佐	多田野 曜平さん
※ミラン・アギ少尉 操舵長	長沢 美樹さん
※トール・フルヤ伍長	櫻井 孝宏さん
※チェーン・アギ	弥生 みつきさん
※アナハイムグループ総帥 キルヒ・レイツ	櫻井 孝宏さん
※ヒロタカ・ソーテル又少尉	櫻井 孝宏さん
※シオザワ技術士官	神谷 浩史さん

ソー／仮想対談ってことで呼ばれたんだけど、なにこれ？

星野／漫画でもそうだけど、長丁場のお話を作るときはキャラの設定書を作って、声のイメージも大体考えておくと作りやすいのよ俺。

ナガ／漫画や小説の編集さんから一番嫌われるやり方ですね。

新人はすぐに自分の好きな作品の声優やらなんやら入れて投稿したり持ち込みたがるって(笑)

星野／俺、新人じゃないけど。

ナガ／玄人が知っててそれやるってサイテーでしょ!(笑)

ソー／なんか化物語の声優さんが多いよ。

星野／あのアニメの長台詞に慣れているだろうからイメージに合いそうな人を当てはめてみたというか。

ソー／西尾維新さんと違ってあなたの文は単純に技術が稚拙だから長台詞なだけでしょ？

星野／あんた、絶対バサ姉じゃねえよっ、ガハラさんだ!! つうか、なんで俺阿良々木君？

ソー／ハイハイ、いつまでも化けトークやってると先、進まないから

アナライズ ストーリーの話しましょ。失礼、噛みまみた。

星野／全然噛んでねーよ! 噛みまみたしっかり発音できてるよ!

ソー／ところでさ、私ラストまで生き延びることができるの？

星野／いきなり切実な話題振ってきた!

ソー／だってこのお話って、一見オリジナルが多く見えるけど、極力進行がアニメに沿って作られてるでしょ。てことはキャラが死ぬことで有名な原作者の作風に合わせるつもりなんじゃないかと思って最近ビクビクものなのよ。
死ぬ方の身になってみ？

星野／自分の子供みたいなところがあるからポンポン、ストーリーの都合で

死なすのは嫌だけどー

ソー／嫌だけどー になによ？ 言いかけて黙るのやめなさいよ。

星野／なんか、ガンダムワールドの作品って、書き始めるとどういいうわけか

キャラ死なせたくなるんだよねー、書いてみて初めて判った。

少しでもシリアスな方面に話が振れ始めると凄い誘惑があるんだガンダムって。

みんなこの誘惑と戦ってるんだ(笑)

ブラスターマリとかほのぼのコメディ漫画描いていても、

根が人情ドラマの人だから池田恵さんこの誘惑と戦ってたんだろうなって。

ソー／わ、私も魔法の少将に転向しようかしら。まだ死にたくない……。

星野／実は2話ぐらいまではその誘惑に負けそうだった。でもなんとか踏みとどまって

4話まで書けた。今でもその誘惑と戦ってる。

ソー／うげっ、うそでしょ!?

星野／いや、マジで。創作経験が少ない一般の人がこの話書いたら、誘惑に負けて

ソーテル又少将2話で死んでるね、まちがいなく(笑)

ソー／ためしに書いてみるね!

さらさらさらっと……………

ソー／わお!! 私、1話で死んじゃった!! になによ、この原作者パワー!?

星野／すごいでしょ。死んでみせねば大作にならんのだじゃ! みたいなこの暗黒パワーは。

ナガ／すごいと言えば原作の矢立肇って人もすごいですよ。ほぼサンライズ作品全部の

原作やってるんですから。非实在原作者ですが(笑)

星野／作品作るときに監督が必ず置いておく合同ペンネームなんだよな。

気休めなんだけどパッと見た感じ責任分担できるーみたいな(笑)

でもホントに実在したら物凄い奴だよな矢立肇って。

一対一の単独勝負なら、宮崎駿どころか世界中のどんなクリエイター連れてきても誰一人太刀打ちできない(笑)

宮崎ランド作ってあれだけ流行るなら、矢立ランドを東京ビッグサイトに

作れば大繁盛間違いなしだよな。静岡から実物大ガンダムまた引っ越しして、

アトラクション一つ造らなくて済んで助かったみたいな(笑)

ナガ／一人であれだけの凄い数の良作を作り分けられたら完全に精神分裂症ですね。

星野／漫画界の大家とか大御所とか呼ばれる人の中には、そういうマネのできる

紙一重の人がいっぱいいるぞ。

ナガ／たとえば?

星野／ て.....

ナガ／ て!?

星野／ い.....

ナガ／ い!?

星野／ な.....

ナガ／ な!?

星野／ し.....

ナガ／ し!?

ソー／ え～～い、あんたたち言ってることが、どんどんヤバくなっていくでしょ！

少しはセーブしろ！

その2につづく？



機動戦士ガンダムサイド アナライズ ストーリー VOL1.6

<http://p.booklog.jp/book/17608>

著者：星野幸介 制作：リスキーナ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rishosipab/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17608>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17608>